

## 國際貿易政策思想史

松 井 清著

本書は、さきに『貿易理論の研究』（昭和十三年刊、増訂第二版昭和十六年刊）を發表して貿易理論の史的展開とその批判を示された本學經濟學部講師松井清君が、その姉妹篇として世に問はれた二部作の一つである。

先づ本書「序説」（一—三〇頁）は、「貿易理論上の國家概念」や「國際貿易の概念」等の問題提出のための概念規定と、「國際貿易政策思想史の課題」を考へることに當てられ、次いで本論に入ると大體時代と國の別によつて大きく三つの部分に分たれてゐる。

第一編の取扱ふところは、英國經濟確立期に於ける貿易政策思想の展開であるが、從來言かれた貿易政策の思想史の多くが、型の思想史にすぎなかつたことに對して不満を抱く著者は、型に代つて個性を取上げ、これを通じて思想の變遷を辿らうとするのである。斯くして、ここには或はスミスが、或はマルサスが、或はリカードが、對象とならねばならない。即ち第三—五章の論ずるところは、要するに産業革命の前夜から産業革命進行中に至るまでのイギリスに於ける經濟思想の歴史的變遷に他ならない。

續いて第二編に入ると、舞臺が一變して、古典的資本主義國イギリスに代つて資本主義の後進國ドイツが登場する。ここに於いても、論述の對象は個性であり、リストとプリンス・スミスとワ

グナーを通じて、資本主義經濟確立期に於けるドイツの貿易政策思想の發展が跡づけられてゐるのである。

最後の第三編は、ハルムスの世界經濟學とハーバラーの純粹經濟學を通じて、獨占資本主義下のドイツに於ける國際經濟政策を述べ、その最後には（第十一章）、現下の問題たる廣域經濟論の主張をば新しい二十世紀國家との關聯に於いて展開することを以て終つてゐる。

以上が本書内容の輪廓であるが、我々は、産業革命の前夜から新秩序建設の今日に至るまでの經濟思想史が、或はイギリスを或はドイツを舞臺として、國際貿易政策思想に焦點を置きつつ、ここにみごとに展開されてゐるのを見ることが出来る。勿論、本書に於ける著者の歴史把握の仕方が、ややもすれば單に類型的に終り、或は圖式主義に陥つてゐるきらひがないではない。また更に著者の如く、貿易政策思想をば單にイデオロギー的側面に於いてのみ取上げ、しかもこれをその歴史的現實との關聯面からのみ批判してゆく仕方に對しては、不満を禁じえぬ人々もないではなからう。然し我々は、何よりも先づ、貿易理論の研究としての著者の理論的研究をばその側面から補ふものとして、その「イデオロギー的批判を擔當したのが本書である」といふ、自序に於ける著者の言葉を想起すべきであらう。

著者松井君は、本書成つて間もたく、再び臨時召集の恩命に浴し、再度戎衣を纏うて今は南溟の天地に建設戰爭の軍に従つてゐる。嘗つて研究室に於いては廣域經濟の理論を構想し、今はペン

を捨てて銃剣によつて大東亞廣域經濟圈確立に挺身してゐる著者の上に幸多かれと祈るとともに、本書が、單に専門家に限らず、一人でも多くの知識人に讀まれることを期待するのは、單に筆者ひとりの友情からばかりではないのである。(昭和十六年九月、有斐閣刊、菊規格三二八頁、定價參圓拾錢)。(中山)

### ヘルディアエフ「歴史の意味」

宮崎 信 彦譯

我々は現代が既に近代と時代を異とする事、即ち近代の指導理念は最早現代の指導理念にはなり得ない事を自覺してゐる。この現代の指導理念が如何なるものかは未だ明確に規定出来ぬにせよ、かゝるものを強ひて過去に求むるならば、それが中世の指導理念と著しく類似する事が認められねばならない。現代が新しき中世であるとは實にこの意味ではなからうか。そして現代の混亂と危機は中世から離脱し神を見失つた近世が自己清算の苦悶であるならば近世迄の歴史を中世以前の精神から分析し、その歸趨を解明する事は誠に興味ある事と云はねばならぬ。ベルディアエフは正にこの觀點に立つものと云へよう。何故なら彼は「誠實なるロシアのギリシア正教徒」であるが、ロシアは或意味に於て歐洲の外に存する即ち近世を持たなかつたのであり、更に西歐思潮最も中世的なるカトリックでさへ宗教改革を経過する事によつて人文主義的洗禮を受けてゐるのであるが、ギリシア正教はこの重大なる

精神革命の圈外に立ち現在迄その精神は「根源に近く保持」されて来たからである。既にベルディアエフは「歐洲が人文主義の可能性を行き盡して中世の暗に進みつゝある」事を「新しき中世」なる論文に於て述べてゐるが、この著はかゝる彼が正面から歴史の問題を問題とした點に限りない魅力を提示するものである。彼の思想及びこの譯の臺本となつた英譯本については既に史林二十三卷一號に中山氏の優れた紹介があり、私はこゝでは單にこの問題の書が宮崎氏の麗筆によつて我々の言葉となつた事を大いなる歡びを以て迎へるにとゞめたい。既に邦譯を見たマリタンやドワソンの諸著など、共にこの著は多くの新鮮なる示唆を我が國史學界に投げるであらう。たゞ譯文は、思想的に難解と云ふ點もあらうが、時に意味の把握に困難なる部分があるのは遺憾である。よく讀めば勿論理解出来る位のものではあるが、しかし讀書の勞を省くと云ふ爲の努力、例へば代名詞などは不正確な國語の缺を補ふためにもそれに適合する名詞を入れて頂いたらと思はれる點などが存する。しかしそれは瑕瑾であつて、英譯の名文の味ひを簡勁なる筆致を以てよく邦語に移された譯者に敬意を表してこの粗雑なる紹介を終りたい。(敵愾書房發行、B 6 版、定價貳圓)(會田雄次)